

## 江戸初期南蛮外科医をめざした明石亜矢物語

松澤 君代

明石亜矢(レジーナ)の苦難の始まりは、亜矢の父である明石掃部守(ジョアン)が西軍副主将宇喜多権中納言秀家の重臣であったことである。関ヶ原合戦(一六〇〇年)で備前の宇喜多家は滅亡した。

当時すでにキリシタン禁教令下であったのに、明石一家は備中大井郡日近、臨済宗安養寺の寺領に潜伏することが出来たのは、安養寺住職と明石掃部守が昵懇の仲であったからである。

**慶長七年(一六〇二)春**、明石一族と宇喜多家の旧家臣団三百名余りは筑前秋月に移住している。これは、黒田官兵衛如水(ドン・シメオン)と掃部は親戚の間柄であったので、その招きによるものである。秋月は官兵衛の義母弟黒田図書助直之(ミゲル惣右衛門)一万二千石の城下町である。直之もまた兄官兵衛や高山右近に勧められ、キリシタンになつてい

たし、妻マリア、嫡男長基(パウロ)もそれぞれ洗礼名を授かつていた。秋月には、長崎の町名にも名を残している富豪末次興善(コスメ)の広

大な屋敷があつた。末次興善は海外貿易で産を成したキリシタンである。そして、二代目の長崎代官となつた末次平蔵は、興善と後妻との間に生まれた男子である。現在、秋月郷土館の構内にあるキリシタン灯籠は、秋月の興善屋敷跡から出土したものである。

明石亜矢は明石一族が秋月城下に移住した時は、十三才になっていた。そして、ここ秋月城内で、領主黒田直之夫人マリアから、女人としての教養と身嗜みのことを、みっちり仕込まれている。時々亜矢はマリア夫人に連れら



サン・ラザロ病院、サン・ジョアン教会跡

れて、興善屋敷を訪れることもあつた。ここで、亜矢は興善の養子、ヤコブ宗得が博多で宣教医ルイス・デ・アルメイダに南蛮医術の手ほどきを受けたことを知り、彼女はこれを機に南蛮医術、とくに「外科治術」に心を惹かれていくのである。亜矢の人生で、ここ秋月で過ごした日々が、一番幸せな時期だったようである。然し試練はもう目の前に迫ってきていた。

**慶長八年(一六〇三)水無月(六月)**、亜矢は京都伏見の黒田氏別邸の如水のもとへ養女として引きとられることになった。如水は亜矢を妻幸圓のもとで花嫁修業をさせ、武士の家に嫁ぐ者としての礼節を身につけさせ、黒田直之の嫡男長基と結婚させる思惑があつた。

ところが**慶長九年(一六〇四)三月**、黒田如水が他界した。(享年59歳)。不幸は続く。**慶長十四年(一六〇九)**、如水の弟黒田直之が四十六才で病死している。直之はこの時、亜矢と長基との結婚を許し、秋月の領主相続は嫡男長基へと、本藩黒田長政に遺言として願ひ出していた。長基の秋月領主相続は、本藩から付家老を派遣し、監視の目を光らせるといふ条件つきで許されたが、結婚は許されなかった。当時の結婚は家と家との契約であり、大名となればなおさら藩主の許可が必要だった。婚儀は人質の側面でもあり、現在のよう恋愛は許されなかった。

長政にとっては、徳川幕府に対しての配慮もあり、キリシタンである長基と亜矢の結婚を許すことは出来なかったものと思われる。そして、この時とどめを刺すかのように、この年亜矢の母モニカ麻耶が亡くなった。二年後**慶長十六年(一六一二)年明け**、今度は、亜矢との結婚を望んでいた秋月藩領主黒田長基が急死。(享年23歳)。早すぎる死であつた。筑紫路の野辺に咲きたる梅一輪 匂い残せよ こぼれてもなお

(長基辞世句)

明石一族は、永住の地と定めていた秋月であつたが、ここからも追わ

### 風信

○四月と言えば入学式、八日は「花まつり」、お釈迦様の誕生日、十日は金比羅、十五日は風頭、二十三日は巡礼観音の「ハタあげ」に行くところ。又、二十一日は「お大師様の日」。私の子供の頃は姉達と一緒に町なかを大いに歩き、小さな米包をお供えし「お接待」を戴いて賑った。その「お接待」の中でも「芋だんご」が一番おいしかった覚えが今もある。

○次に四月(旧三月二十三日)には崇福寺の「媽姐様の誕生祭」がある。「唐寺おおいに賑う」と長崎名勝図絵にも記してある。媽姐様は其の昔、中国福建省福州嶼の林氏の六女として生れ、後ち靈威をうけ「海神」として祀られ、現在に至っている。毎年この日には崇福寺に多くの中国人達が集まって来られ山羊・豚・魚・果物等のお供え、紙銭、爆竹と大変にぎやかな供宴が開かれている。現在・長崎の二年中行事になっている「ランタン・フェスティバル」は之の行事を取り入れたものであると言う。

○先日、広島市立大学の桐谷多恵子先生来訪、お祖母様が長崎立山で原爆の被害にあわれたと言う事もあつて、「長崎・広島の人達と原爆平和問題についての考え」について論考してみたいとの事であつた。この時、先生は「長崎の人達の考えには何か国際的なものを多く感じますね」と言われた。

○続いて「長崎郷土民謡保存会」の平川波声氏来訪。ここ数年来休止となつている「長崎ぶらぶら節全国大会」を再興したいので協力して戴きたいとの事。「長崎を中心とした全国大会であり、長崎市民は全て協力いたしますよ」と励ましの言葉をお贈りした。

○五月四日(みどりの日)は恒例により第八回長崎県九条の会主催・本会協賛の「長崎平和関係史跡めぐり」を開催。今年には稲佐の悟真寺国際墓地を中心にキリシタンの桑姫様の塚・唐人・オランダ人・ロシア人墓地・ステッセル將軍上陸の地等を歩く。当日は午前十時・竹ノ久保淵神社前集合(雨天中止)。自由参加(会費不要)(事務局)井田洋子・大矢正人・葛西よう子・越中哲也 今月ご寄贈をうけた書籍

一、障害者支援施設「草笛が丘」より『ともしび六号・平成二十五年年度年報』。施設長川辺女史の文章に「うちは障害者の息子と二人、正月二人で若水を沸かし佛様にお茶をあげ、お膳につきました」とありました。(平戸市田平町) 一、土肥原和夫氏より『禾の記』を戴く。文中に「父が生前いろんな所で書いたものを一冊にしておきたい」と妹・岩永末弓と話したことより編纂された由、「鳥居考」は大いに参考になりました。(私刊本)

れる運命になった。そして、明石一族の離別が始まるのである。掃部と亜矢は、長崎初代代官村山等安を頼つて長崎へ。等安もまたキリシタンであつた。ここ長崎で、亜矢はミゼリコルディア本部所属の病院で、念願の医療技術を学ぶことになった。ミゼリコルディアはイエズス会管轄下の福祉事業の団体で医療と救貧、および、孤児院、養老院の経営をしていた。彼女は**慶長十六年秋から慶長十九年春まで**、このミゼリコルディアのサン・ラザロ病院(現在本蓮寺)でイルマンの外科宣教師医者から南蛮外科の施術を学んでいる。

### 慶長十九年(一六一四)大阪冬の陣

### 慶長二十年(元和元年)(一六一五)大阪夏の陣

大御所家康の謀略によって始められた大阪の陣は、豊臣氏を滅亡させた。とりわけ、夏の陣の戦禍は悲惨であつた。明石掃部と亜矢は豊臣方として戦つたが結果は敗北。掃部は大阪城から脱出、村山等安の子ジョアン秋安の船で高砂の国(台湾)へ逃亡した。亜矢は捕らえられたが、家康は釈放を命じている。以降、亜矢は大阪のレジデンシアで医療活動に従事。

**元和四年(一六一八)一月**、翌年十一月まで、日本の空にはただならぬ流れ星が現われては消える転変地妖がおこつた。この頃、村山等安はキリシタンであつた為長崎代官職を罷免され江戸で処刑されている。

**元和五年(一六一九)**、二代將軍秀忠の時、京都では、すでに大々的なキリシタン禁制が始まつていた。大阪の地も安住の地ではなくなつてきたので、十二月、亜矢はトルレス神父を介護しながら堺港へ出る。そこから西ルイスの交易船で長崎へ向つた。再び訪れた長崎、キリシタンにとってはパラísoであつたはずの長崎の町、しかしもうそこには昔の平和はなかつた。長崎でもキリシタン禁令が始まつていた。

絶望の淵に立たされた亜矢。しかし、彼女の前に手を差し伸べてくれた人がいた。有馬村出身のアントニオ石田神父である。彼は有馬のセミナリヨで天正遣欧少年使節に選ばれた中浦ジュリアン・原マルチノらと共に学んだ人物だつた。石田神父は亜矢に「マカオに住む原マルチノのもとへ行き、あなたの夢である外科医への道をめざす」ことを進めてくれた。

**元和六年(一六二〇)**、亜矢は強い決意を胸に秘めてマダレイナ号に乗船。長崎の港からマカオへと旅立つた。この時亜矢31歳であつた。

(長崎歴史文化協合理事)

長崎歴史文化協会 研究室

TEL 八二二一 一五四〇

十八銀行公会堂前出張所 2F

